

編集委員長就任にあたって

中尾 智博 Tomohiro Nakao

日本精神神経学会理事，精神神経学雑誌編集委員会委員長

2017年10月から2022年12月まで精神神経学雑誌（以後本誌）編集委員長を務められた大森哲郎先生のご退任に伴い，本号から本誌新編集委員長に就任することになりました。1902年の第1巻刊行以来120年の歴史をもち，本邦における精神医学の発展に大きな貢献を果たしてきた本誌の編集委員長の任に就くことを大変光栄に感じるとともに，その重責に身の引き締まる思いでいます。どうぞよろしく願い申し上げます。

本誌は，会員数19,000名を超える日本精神神経学会（以後本学会）の機関誌であり，本邦で最も多くの人に読まれている精神医学の専門誌です。著者自身も，精神科医として成長するにあたって本誌は欠かせない存在でした。臨床や研究の実施にあたって生じるさまざまな疑問も，本誌のバックナンバーを丁寧にあたることで古典的な知見から最新の知見まで見つけることができ，その信頼度は非常に高く，また和文が中心であることから欧文誌に比して知識の取得が容易であることも本誌の特長と感じています。

2014年，本誌は電子ジャーナル化されました。精神医学の領域における最大手の雑誌である本誌が商業誌に先駆けて電子化を果たしたことは，当時本誌の一読者であった著者にとっても大きな驚きでしたが，時代の潮流と現在の普及状況を考えると当時の編集委員会の決定がたいへんな英断であったことがわかります。また，電子化をしつつも紙媒体を残し，現在も約7,000部を発行している点をみても，本誌編集委員会が幅広い層の会員と向き合い，バランスの取れた判断を行っていることがうかがえます。さらに大森前編集委員長時代には，症例報告における同意取得の義務化，投稿資格の会員外への開放，電子ジャーナル1年後無料公開化，著者資格の明文化，誌面刷新などが行われました。このように，絶えず時代に合わせたアップデートが行われている点も，本誌の大きな魅力といえるでしょう。

著者は2021年に本誌編集委員に就任し，同年の本学会理事就任後は主担当理事および副編集委員長として本誌に

携わってきました。短い期間ではありますが痛感するのは，本誌においては，編集委員，外部委員の2名による丁寧な査読が実施され，その後委員会での審査，修正を経て，選び抜かれた良質な論文のみが掲載されているということです。2021年実績で原著論文採択率23%，症例報告や総説を含む総ジャンルの採択率34%と決して易しき門ではありませんが，この厳密な査読システムこそが本誌のクオリティを担保しているのだと思います。やや狭き門ではありますが，本誌に掲載されることは論文執筆者にとってもたいへん有意義であると考えます。採択率についても，クオリティを担保しつつ上げる試みに取り組んでいきたいと思っています。投稿にあたっては，本学会ホームページ上から閲覧可能な，2013年の総会で行われた本誌ワークショップ「精神医学論文の評価と書き方」，2022年総会ワークショップ「研究のまとめ方，論文の書き方」をご参照ください。

現在本誌が行っている主な取り組みとしては，DOI（digital object identifier，URLの変更に影響されず永続的に文献にたどり着ける学術論文などの国際的な識別子）の獲得，掲載論文のDeepLによる機械翻訳と英文化の実施があります。これらの取り組みにより，本誌掲載論文がいつそうその価値を高めていくことが期待されます。また，本学会の国際誌である『Psychiatry and Clinical Neurosciences』『Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports』との連携も重要であり，それぞれの雑誌の特長を活かしつつ互いに発展していければと考えています。

思いつくままに書き連ねてきましたが，本誌は本邦の精神医学，精神科医療の発展に欠かせない存在であると思います。その編集委員長の任は，重責ではありますがたいへんやりがいのある仕事と感じています。丁寧な査読による良質な論文の提供，幅広い読者層に対応する臨床・臨床研究を中心としたコンテンツの充実，時代に合わせたアップデートを心がけながら，この大事な任務を遂行していきたいと思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。